※文字の大きさは MS ゴシック ／12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。
※具体的に示したい図、写真、表、グラフなどは、適宜文章中に挿入してください。各項目の枠の上下幅は変更可能です。
※いずれの場合も、必ずＡ３片面１枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは５MB 以下としてください。

※事務局記入欄
No.090

【様式２】

エントリー名：横浜市立旭小学校　玉置哲也

活動名：校内研究を「なぜ」から問い直す　～大人も子供も一人ひとりを大切にする学び～

解決すべき課題

本校は、経験年数５年未満の教職員が学級担任の約半数を占め、授業力向上が課題である。ただ、働き方改革や、コロナ禍があったりした中で、勤務時間内に大人の学ぶ機会が減っていた。

その中でも、校内研究に関しては、「やらなければならないこと」という認識がある一方で、負担感をもつ教職員が多く、時代の流れも重なり、縮小しながら取り組み続けていた。そして、一つの研究テーマを設定したり、研究教科を絞ったりする方法だったため、教職員一人ひとりの問題意識に直結しないことも多々あり、やりがいを感じにくい校内研究となってしまっていた。

目標

教職員一人ひとりの違いを踏まえた校内研究を行い、学ぶ楽しさを実感することを通して、自分たちと同じように子どもたち一人ひとりも「違う存在」であると認識し、授業改善に活かす。

方針

①これまでの慣習を問い直し、校内研究の価値を改めて設定する。
②今年度の授業実践に関する目標を一人ひとり設定し、「自分なり」に成長できるようにする。
③大人が学ぶ時間を増やすための働き方改革により、インプット重視の校内研究にする。

活動内容

「子どもの姿で語る」を核とした校内研究の在り方改善（方針１）

〇本校教職員の多くが、非授業者（参観者）として、校内研究にどのように参加するかということを考えたり指導されたりする経験がなかった。その結果、非授業者の発言を通して、授業者が周りの教員に評価されるという意識をもつ人が多くなってしまっていた。そこで、非授業者の在り方に着目し、本校の校内研究では、「非授業者が授業者の意図を中核に据えて参観した子どもの姿を根拠に感じたことや疑問について語り合うことを通して、授業者、非授業者共に子ども理解を深めたり、指導方法についての引き出しを増やしたりすること」を目的とした。

〇語り合うには、教職員同士の関係性が最も重要であると考えた。新年度初日、長期休業明け、毎月の職員会議等で教職員同士が互いのことを知り合える対話の機会をもてるようにした。

学校教育目標具現化に向けた「自分なりの目標」設定（方針２）

〇キャリアも問題意識も様々な教職員がいるので、全員が同じ問題意識をもって授業改善に臨むのは難しい。そこで、教職員一人ひとりが、学校教育目標具現化に向けた「自分の課題」を解決できるように「全体性のたまご」（井庭・宗像 2018）を活用して自分なりの目標を設定した。そして、その目標達成に向けて、同僚と助け合いながら取り組んでいく校内研究とした。

インプットの機会を意図的に設定した研究計画の立案（方針３）

〇教職員は、日中をほぼ教室で過ごし、放課後も事務処理や会議、保護者対応などで、あっという間に勤務時間を終えることが多い。さらに、翌日の授業準備に追われる中で、教育観や指導観を問い直す機会が少ない。そこで、毎月１回全学年午前授業日を設定し、有識者の方を招いた研修会を開き、勤務時間内で教育観や授業づくりについてアップデートできるようにした。

〇これまでは授業公開日に外部講師を招き、実践後に指導してもらっていた。それを指導案検討など授業づくり段階から外部講師と共に授業構想をするというように外部講師との関わり方を変えることで、授業づくりの段階からインプットをしながら授業改善に臨めるようにした。

取組の過程

【令和３年度】校内研究の在り方を見直す→教職員で見合う意義をマインドセット（方針１）

「校内研究って全員が１回授業公開した方がいいですか？」

令和３年度初めての研究推進担当会議で推進委員長を担当している教職員から投げかけられた問いである。「全員公開がよい」「現状、学年１名公開なのに、全員にしたら負担感が…」と議論を重ねる中で、研究方法ばかりを検討して、「なぜ校内研究を行うのか」という目的を考えていないと気付いた。その後、他の教職員に授業を見られることに負担感が強いことが分かり、授業を見合う意味から考え直すことにした。結果、同じ子どもを様々な人で観ることにより、見とる力を高めるという意義を見い出した。そして、指導案等の作成は無くして１年間授業参観を繰り返し、「子どもの素敵だと思った姿について子どもの名前を挙げながら語り合う」ことを通して、子どもを見とる力を高めることを校内研究の目的とした。また、語り合うためには、教職員同士の関係性構築が必須と考え、職員会議等放課後の在り方を見直し、同僚のことを知り合う対話の機会を定期的に取り入れるようにした（図 1）。

図1全教職員で対話する様子

【令和３年度】実際に観た子どもの姿から全教職員で学校教育目標を作り直す（方針１）

年度末に、これまで見付けてきた子どもの素敵な姿を踏まえて、「旭小学校の子どもたちに伸ばしてほしい力」を全教職員で考えた。その結果、「思いをもつ力・関わる力・やり抜く力」を育みたいということになり、学校教育目標に設定した。

【令和４年度】学校教育目標の具現化した姿を全教職員で考える（方針１）

作り直した学校教育目標を子どもの姿で具現化することを目指して、この１年間も授業参観を繰り返し、学校教育目標を具現化していると考えられる子どもの姿を語り合うことを繰り返した。しかし、年度末の振り返りで教職員から「子どもの良いところを語り合うのもよいが、改善点や授業づくりについても考えていきたい」という声が挙がった。この声をきっかけに、「子どもの姿を根拠に授業改善を重ねていく」と校内研究の目的を再設定した。

【令和５年度～６年度】教職員一人ひとりが自分なりに成長できる校内研究（方針２）（方針３）

前年度末の教職員の声を踏まえ、「授業力向上」を校内研究の目的にした。授業力向上とは、横浜市教育委員会作成の人材育成指標に基づき、学校教育目標具現化に向けた授業実践を通して、「子どもの姿を根拠に、自分の授業の変容について語ることができる」こととした。

図 2 課題設定シート

授業力向上に向け、教職員一人ひとりが自分の目標を立て、その目標を具現化した子どもの姿を想定する課題設定シートを作成した（図 2）。

公開授業までのプロセスは、①授業アイディア相談会②指導案検討③公開授業・事後研究会という流れで行う。①授業アイディア相談会では、授業者が、授業のねらいと簡単なアイディアを準備して相談する。この相談会には、公開授業当日に指導していただく外部講師の方を招き、授業づくりの基礎・基本から授業アイディアを提供してもらうなど、同僚のように参加していただき、授業の方向性が具体化されるだけでなく、授業者・非授業者共に教科指導に関するインプットの機会となった。

図3学び語りの様子

そして、このプロセスを共にしている非授業者は、公開授業を観に行くのではなく、授業者の目指す子どもの姿を「探しに行く」という在り方に変わった。

年度末には、自分の授業力向上について、具体の子どもの姿を挙げながら語る「学び語り」（図 3）を行い、自分なりの成長を言語化した。

活動の成果（教職員の声の一部を紹介します）

校内研究に対して前向きな声、子ども一人ひとりを大切にしたいという声が挙がってきた！

・新しい試みでとても楽しかったです。これまで校内研究を楽しいと思ったことはなかった。
・私は A さんに対して〇〇の手立てをしたけれど、他の先生が私なら…と話してくれたのは、これまでの校内研究にない点だった。
・教師自身が常に目の前の子どもを考えて、どう育ってほしいか考えることが大切だと感じた。
・あの子にこうなってほしいと考えて授業をつくることが大切と感じました。これをクラス全員分考えられた一番いいのかもしれないと思うようになった。

大人の学ぶ楽しさと子ども一人ひとりを考えて授業改善する大切さが実感できるようにこれからも校内研究をアップデートしていきたい！